

▼分教室外での活用▼

①連絡帳としての活用

本児の場合、平日は主に祖父が、週末は両親が付き添うことが多かった。日々の学校での様子は次のようにして家庭に伝えていた。

- ・祖父に本児や担任が直接伝える。
- ・本児が家庭に電話して伝える。
- ・担任と母親の携帯にメールでのやり取り(写真6)。

こんばんは🌟
隆ちゃん、アイソと食止めは続いています。今日の午後くらいから気持ちが上がってきて、筆談でなく会話で話ができ授業もスムーズでよくやっていました👏👏
空腹で力が出ず、お風呂でたくさん転んだと話をしていました👏お母さんやお父さんとの手紙のやりとりは隆ちゃんの支えになるだけでなく、とっても楽しみなようで、夕方、隆ちゃんのベットに行く「今日はもう書いたんたをよ」と嬉しそうに話してくれました👏

こんばんは👏
いつもありがとうございます!👏
今日は夕方隆仁から電話📞がきました。随分元気な声だったので安心しました。ALTの先生の話もしてくれて、180センチメートル以上あって、とても背の高い方だと伺いました。また、モンハンもするとって嬉しかったようです👏
食べたいもの🍴🍴作りたいものがたくさんあるんだと話してくれました。👏👏

担任から母親へ(2012.12.13)

母親から担任へ(2012.11.29)

写真6 担任と母親のメールのやり取り

iPad のメールや Skype など、病棟内でのインターネット回線を使用することは分教室の教員や児童には安全上認められていない。また、病棟の規則により携帯電話の所持は中学生からである。そのため、本児は放課後に病棟内の公衆電話で両親との連絡を取っている。写真6の母親から担任へのメールには、本児が母親に電話をして学校の様子を伝えていることが分かる。体調によって明るく伝えることもできれば、治療のために食止めになって辛い状況を伝えている日もある。しかし、体調が悪い場合には自分の病室から数メートルの公衆電話まで歩くことが難しく、担任が自分の携帯から母親の携帯にメールで必要に応じてその日の様子を伝えるようにしていた。本児自身も両親と話したい気持ちが強いが、辛い治療に差しかかると、「電話で話そうとすると涙が出てしまい、自分の気持ちが伝えられない」との理由から毎日手紙を書き、祖父が帰宅するときに預かって両親に渡すという時期もあった。写真6の担任から母親へのメールには、本児が両親との手紙のやり取りを楽しみにしている様子が分かる。手紙は直接本児が自分の思いを綴れるという点では有効だが、理科などの複雑な実験の様子や調理実習の楽しい様子などは手紙や電話では伝えにくい。そこで、手紙で伝えにくい内容は「カメラ」や「ムービー」で記録し、祖父を通じて iPad を家庭に持ち帰ってもらい学校での様子を見てもらうこととした。写真や映像で本児の学習の様子を家庭で見てもらえたことで、直接電話をする母親だけでなく父親や兄、祖父母にも本児の様子がよく伝わって家族間で共有できるとともに家族のコメントも本児に伝わり、よいフィードバックになっていた。

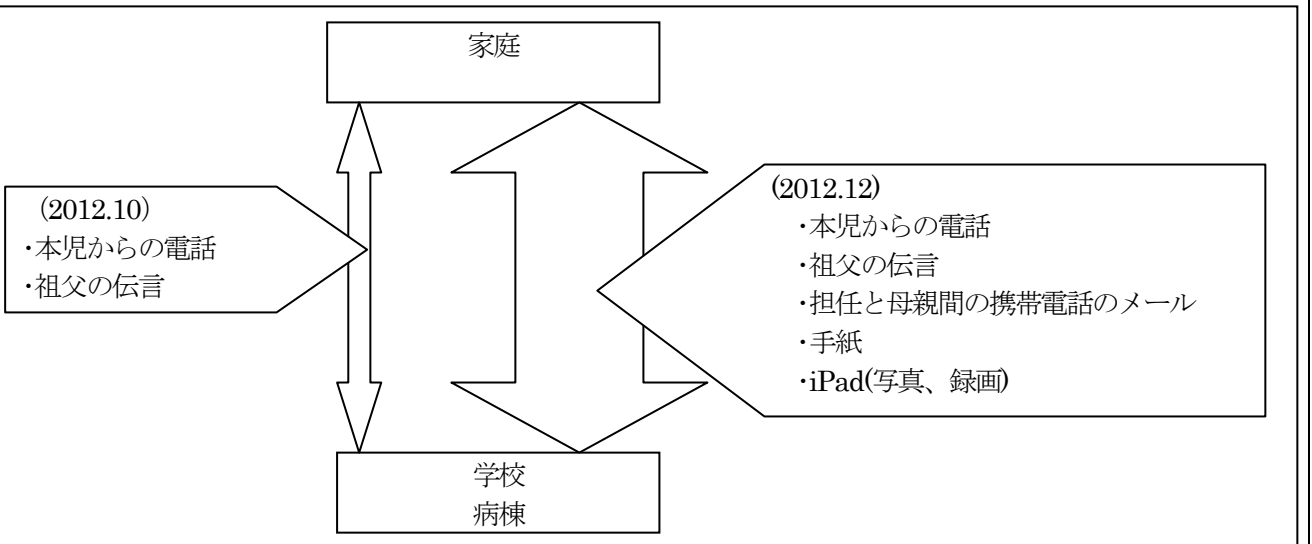


図1 家庭と学校の連携図

家庭と学校の連携の様子を図1に示してみた。本児の場合、9月までは母親が仕事を休んで付き添っていたので、母親から付き添いが祖父に変わった10月と、12月を比較してみた。10月当初は本児からの電話と祖父の伝言だったものが、12月には担任と母親間の携帯電話のメール、手紙、iPadの写真、録画が加わり、それらを必要に応じて柔軟に使用するようになった。毎日同じ方法というのではなく、体調や気分、学習内容や家族に伝えたい内容によって、本児が自然と連絡方法を選んでいくようになり、連携の矢印が太くなっているのが分かる。

②外泊時の活用



外泊時にはiPadを持っていき、家族とのコミュニケーションの手段の一つとして活用も見られた。本児には中学生の兄がおり、兄弟ともにバスケットボール部に所属しているため、入院前は活発に遊ぶことも多かった。しかし、本児の入院により状況が変わり、本児の体調に十分考慮した遊びが必要であり、iPadのゲームアプリは兄弟の遊びでも有効なものとなった。また、本児自身が家庭での外泊の様子を写真や録画で記録し、学校に外泊の様子を伝える手段としても役に立った。

(写真7) 外泊時にはiPadを手にする様子

<その他>

本分教室が大学病院内設置の分教室であることから、病状によって在籍する児童生徒は様々である。そのような中で今回、対象とした児童以外でもiPadは有効であった(写真8,9)。

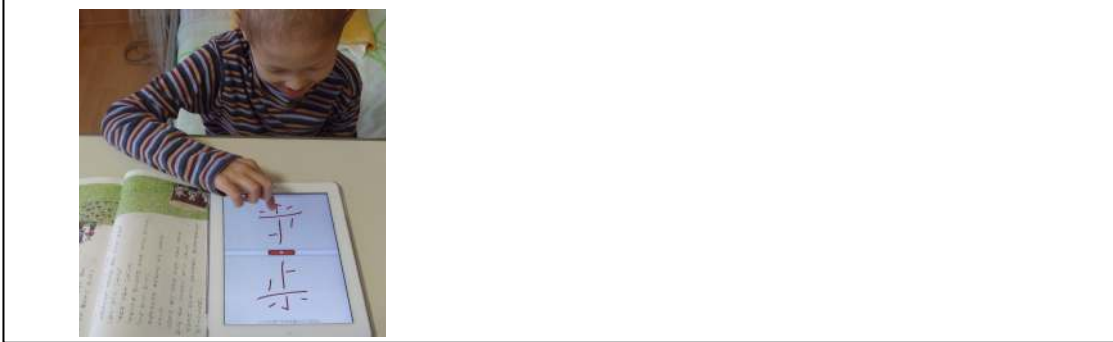


写真8 小学部2年児の国語 (活用アプリ: HitsudanPatto)

小学校低学年時の国語においては漢字の読み書きだけでなく筆順も重要な学習である。写真8はベッドサイド授業における漢字の学習の様子である。対面した教師と筆順を学習できるだけでなく、誤りを加筆でき、点滴のルートを確認している児童の場合には消しゴムを使わずに消せる点もよい。

<まとめと今後の課題>

1台は対象児を決めて分教室、病棟、家庭とそれぞれの場所での活用の様子を追った。対象となった児童はその日の体調や治療に合わせて、柔軟にiPadを活用していく様子が見られた。学習の手段としてはもちろんであるが、ゲームなどを通しての友達とのコミュニケーションの手段や家族とのやりとりの手段となるなど、その時その時の状況に応じた活用が見られた。iPad活用当初はゲームアプリに触れて気分の転換をはかることが主だった児童が、現在は目的に合わせて主体的にiPadを活用している。

もう1台は、分教室に在籍する児童の転入と転出に合わせて、流動的に活用した。緊張して分教室に転入した児童にとっては気分をほぐすものとして、病状や治療によりベッドサイド授業となる児童にとっては気分転換になるのはもちろんのこと、横になった状態で学習を進めることにも役立っていた。

さらに、本校と分教室においてはまだ繋がるツールがない状態であるため、iPadにSkypeをダウンロードして本校の学校祭の様子を中継し分教室で参観することも試みた。音声や映像が途切れることが多かったものの、本校の学校祭の様子を見ることができた。

病状や治療、入院生活など様々な要因により学習や生活に制限がある児童にとって、iPadは学習の可能性を広げてくれるものであったように思う。しかし、今回が初めてのiPadの導入であったことで、さらなる活用方法があったのではと思う。そして、病棟内でインターネットの使用が可能になれば、活用の幅が広がることを期待できる。今後も折に触れiPadの活用を学習していきたい。